

慢性腎臓病と統合医療

埼玉医科大学腎臓内科 教授 鈴木 洋通

CKD(Chronic Kidney disease : 慢性腎臓病)とは

腎臓になんらかの異常が見いだされ、それが6か月以上継続した場合に診断される。尿(蛋白尿とアルブミン尿)、と血清クレアチニン値を基に計算される eGFR(estimated glomerular filtration rate : 推算糸球体濾過量)からその重症度を決定している。

何故 CKD という考え方が登場したか

CKD という概念は米国で 2002 年に提唱され、日本でもそれに追従する形で慢性腎臓病という名称を採用した。これは CKD が2つの意味——腎代替療法(透析と腎移植)と心臓病の予後決定因子——で医療において重要であるとされるようになったからである。

統合医療とは

現在本邦では西洋医学中心で医学がおこなわれているが、実は特殊な形で民間医療と称されるものが流行っている。これらは十分な検証がされていないものが多い。しかし伝統的な医療、たとえば漢方や鍼灸はきちんとした理論に基づいておりそれらを西洋医学と適切に組み合わせて個々の患者さんを診ていくのが統合医療である。

なぜ CKD に統合医療は必要か

CKD は様々な症状を全身におこすが、それに対する明確な治療法が少なく、かつ、直接に CKD を改善あるいは治療する薬物療法はほとんどないといっても過言ではない。そこで積極的に統合医療という概念をとり入れていく必要があるのではないかと考えている。